
俺はここにいる!

ひー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はここにいる！

【コード】

N0946N

【作者名】

ひー

【あらすじ】

存在感が皆無な主人公、須藤陽介が、周りの人達に気づいてもらうため、いろいろと頑張ります。

存在感（前書き）

1話1話の区切りが上手くないかない……

存在感

この世には2種類の人間がいる。それは、普通の人間と特異体質を持った人間だ。俺、須藤陽介は残念なことに後者の人間だった。

小学生の時はまだ普通だった。が、中学に入ってからその片鱗が見えはじめてきた。例えば、俺が友達に話しかけたとしよう、そしてその友達は一瞬ビクツツとしてから返事をするんだ。まるで、今まで隣にいたのに気づかなかったたのよう……。つまり、存在感が薄いのである。

でもまあ、それはまだいいほうだ。今と比べれば……。

高校二年生となった俺は、周りの人が全く気づいてくれなくなった。そのせいで自暴自棄になりやさぐれていた。学校に遅刻しても誰も気づかない。授業中に立ち歩いてもだれも気づかない。話しかけてもだれも気づかない……。そんな俺は常に目立つことを考えていた。

そして今、絶好のチャンスが訪れていた。

交差点、横断歩道を渡っている一人の少女がいた。そしてそこを、止まる気配をみせない一台の車が通ろうとしていた。少

女は気づかない。周りの人も動く気配なし。このままいくと、少女は大変なことになる。 あの人を助ければ目立てる。

そう思いつくと俺はいつの間にか走りだしていた。俺は飛び込むように少女を突き飛ばした。 (こ

れである人は安全圏……って、あれ？俺、何してんだ) ようやく今までの行動を理解した、そして俺はあおざめた。この後の展開を予想して……。
ドスン!!

翌朝、俺は目が覚めた。いつもの朝と違う環境で頭がついていない。 とりあえず1番気になったのは包帯で覆われ

た俺の左足。 昨日のことを思い出してみた。

……だんだんと状況がわかってきた。 ふう、と息をつくとき夕イミングよくコンコンと控えめなノックが聞こえてきた。

誰だろうと考えていると、スライド式のドアが開かれその人物が入ってきた。 昨日の少女だった。「あいつ、昨日は助けていただいて、ありがとうございましたっ!!」

そう言うのと勢いよく頭をさげた。

「あー、うん、いいよ」

微妙な返事だった。 (テンション高いなあ)

それが少女の第一印象だった。「足、大丈夫ですか?」

「さあ、ギブスしてるってことは骨折したんだろうけど」

骨折ですか!？」 ……少しうるさい。

「多分な、…てか、病院だから静かにしようぜ」

「あう、すみません……」

少女はしゅんとなった。

会話がやみ、俺はまたぼーっとしだした。

少しの時間が経ち、少女が口を開く。

「名前とか聞いてもいいですか?」

「あー、名前?……須藤陽介だ17歳」

名前を教えるても覚えてくれないと思っただけで何となく教えることに

した。

「私は佐藤美月。同じく17歳」

俺と同じだったのか……。

「だったら敬語はいらえない使わなくてもいいよ」

「うん！」

そこでまた会話がなくなる。

あー、なんか気まずいなあ。俺、話しするの苦手だからなあ。

この空気を打開するために話題を探したが美月の方が先に話しを振ってきた。

「なんで、私を助けようと思ったの？」「……体が勝手に動いてたんだよ。よくわかんねえけど」

「なんで？」

「多分、目立ちたかつたんだ」

「え？」

美月は驚いたような顔をする。

「たったそれだけの理由？」

「俺にとってはそれが重大なことなんだよ……」

「なんで！そんなどうでもいいことで命を粗末にするようなことをしたの！」

「命を粗末って……。その結果、あんたを助けることができたんだぜ」

それに、といったん区切り

「俺は目立てないと死んでんのと一緒なんだよ。何も知らねえくせにどうでもいいことなんて言ってるじゃねえ」

美月を睨みつける俺。なんか怒ってみた。

「何言って「あの、ここ病院なんで静かにしてください」

……ヒートアップしすぎだな。

声の主の方をみる。看護師さんがいた。「一人で何騒いでるんですか」

「え、一人？」

チラツと俺をみる美月。俺はただ、ぼーっとする。

「あなた、お見舞いですか」

「え、ああそうです」

「この部屋は今使われてない……って、あれじゃあなんで私はここに」

「私がつるさかったからでしょ」

「いいえ、私は確か昼食をここに届けに……」

「？」

俺はただぼーっとしながら二人の会話を見ていた。

ずっとこうしているわけにもいかないので、二人に助け舟をだしてやることにした。

することは簡単だ。昼食を持っていくだけでいい。

そうするとはっと何かに気づいたように看護師はこの部屋を立ち去った……

「え？どういうこと」

美月は状況が理解できないようだ。まあ、当然だけど。俺は混乱している美月をみながらご飯を食べていた。

ご飯を食べた後、美月に俺の事情を話してやった。

まだ信じきれない所が見えるが、どうせ今日限りだから深くは説明はしなかった。

「ところでなんだけど、あんたってどこの高校なの？」 唐

突に美月が聞いてきた。 「柳岡高校だけ

ど……」 なんか、最初とキャラが変

わってる…… 「柳岡高校!？」

「ん？そっただけど」

「私、そこに編入するんだけど」

「え、マジ？」

「本当」

なんか運命的だなあ。ん？ああそういうことか。

「多分だけどさ、美月俺のクラスにくると思う」

「なんでそんなことがわかるのよ」

「それはだな、俺が特異体質だつてことはわかったよな。それが俺のクラスには俺の他にもいるんだよ」「どんななの」

「主人公体質」

「……てなに」

「ほら、よくいるだろ、無条件で女子にモテるやつ。それが主人公体質。転校生美少女は主人公の下へ、てね」

「なるほどね。てか私が美少女で……言い過ぎ」

存在感（後書き）

投稿が難しいです

福引(前書き)

短いつす

福引

時刻は午後5時を回ろうとしていた。

「さて、そろそろ帰るかな」

左足を庇うようにして立ち上がる。

「ちよつと！あんだ骨折してるのよ！」

「知ってるけど」

「知ってるけど、じゃないわよ！入院するんじゃないの！」

「入院したつて気づいてもらえないから家にいるよ。それと大声だ

さないでくれ。足に響く」

「……なんか不憫だ」二人はそんな会話をしながら病院を出た。

陽介の存在感が皆無なため、美月が独り言を言っているように見えて周りから痛い目で見られいたのは言うまでもない。

松葉杖で脇が痛い。そう思い始めたのは商店街に入ってからだった。歩くのが疲れる。松葉杖つてけっこう不便なんだな。

「ちよつと！遅い！」ええ、こんなに

辛いのにさらに追い討ちをかけるって……。「何そんなに急いで

んだよ。そして大声だすなつて」福引にい

くからに決まってるでしょ」福引つて……そんなもの

ために俺は辛い目にあつてたのかよ」

「そういつけどね、福引のおかげで私は生きているようなも

のなんだからね」福引に人の生き死にを左右する影

響力はねえよ」「それはどうかかな」自信ありげに言う美月だが、

俺にはそこまで福引を重要視する理由がわからなかった。

後、ここまできると痛い目で見られている
ことを美月は知っているんだろうか。

「お、おめでとう。二等五万円当選です……」

店のおじさんが笑顔を引き攣らせて言う。

「はい、ありがとうございます」十万円が入った封筒を受け取る美月。
……こいつ、当てやがった。しかも、さも当然のごとく。
な、慣れている。

「美月、もしかしてこの常連客か？」

「ここに来たのは三回目。賞金を貰うのも三回目」

そうか、だからおじさんの顔がこんなにも酷いのか……。

「さ、帰るわよ」

「お、おう」

俺達はこの場を去った。

「ん？もしかして……」

俺は思った。いや、確信した。

「どうしたのよ」

「美月って特異体質？」

「はぁ？なんでそう思っつものよ」

「だってお前、福引を毎回当てるとか運よすぎだし」

「え、そうかな」

「いや、そうだよ」

……にしても、今日はかなり美月と話したなあ。

「はあ」

「どろしたのよ」

「いや、なんでも」

福引（後書き）

区切れが悪いっす。

あ

どうせ明日になれば美月も俺が見えなくなるんだろっなあ。

「あつそ、……あ、ここ私ん家だから」

目の前のアパートを指さす。

「高校近いから引つ越したのよね」

「俺もここに住んでるんだけど……」

「ええ！？……て、そっか主人公の影響か」

「いや、それだったら俺の近くには住まわせない。……多分だけど美月の運の影響だ」

「あんたの近くに住んでるのがなんで私にとって運がいいってことになるのよ」……なんかいやそうな顔してる。ちよっとシヨックだ。

「自分の体質の事を知るためじゃねえの。それと、それを伝えるのが俺みたいな冴えない奴じゃ恋愛が発生しないからな」

「それも、そうね」

俺の顔をまじまじと見て言う美月。

……納得はしてないけどその通りだから悔しいところだ。

「俺の部屋ここだから」

「そう？じゃあ、また学校で」

また、か……。

「おう、美月が俺が見えたらな」

俺は鍵を開け中に入った。

陽介とわかれ、自宅のソファーに腰掛ける私。

今日は楽しかったな。不意にそんな事を思った。

「俺の事が見えたら、か。見えるに決まってるじゃない」
「だってあんたは、私の命の恩人なんだから」

柳岡高校の二年三組の教室。そこに今、誰にも気づかれずに俺はいた。別に隠れているわけではない。堂々と自分の席に座っている。それなのに気づかれない。そんな俺が退屈しないためにすることは人間観察だ。

これがまた面白い。そして最近では井上達也を観察している。達也は特異体質だ。それも主人公体質という、俺よりは遥かに良い体質だ。それと……

「おつす、貴史」

「よう、達也。聞いてくれ！今日転校来るらしいぜ！」

「ほう、で、どんなやつ」

「女だよ。しかもかなりかわいい。さっき廊下ですれ違ったんだけど、目があったらニコツて笑ってくれたんだよ。絶対俺に気があるよ。達也もそう思うだろ？」

「はいはい思う思う」

それと、日高貴史。別名、噛ませ犬。主人公の親友のようないじられキャラなのがこいつだ。貴史も一応特異体質。

まあ二人についてはこんなもんだらう。

以上が観察してわかったことだ。

……俺ってかなり暇人だなあ。

あ

ふう、緊張するわね。私、佐藤美月は二年三組の教室の前でそう思った。

「じゃあ入ってきて」その言葉を合図に教室に入る。入る途端にクラス中に歓声が沸く。

教壇に上がり自己紹介する。

「佐藤美月です。よろしくお願いします」

言って軽くおじきする。するとさつきよりも大きな歓声が沸いた。

「美月ちゃん！俺、彼女いないからいつでも告白していいから！」

あ、さつきすれ違った人だ。同じクラスだったんだ。

「はい、静かにして。じゃあ美月さんの席は、窓際の一番後ろね」

「一番後ろ……」

そこにはいた。陽介が。なんかぼーっとしてる。

「ここですか？」

陽介の前の席を指さす。

「そこよ」

ここ、か。席に座る。

陽介、ここまで気づかれないんだ。予想以上だ。でも、私は気付ける。

まあ、陽介は命の恩人だし、みんなに気づいてもらえるように協力してあげようかな。

私は密かに決意した。大変そうだなあ。

クラスのみんなに質問責めにあっている美月を見て思う。助けを求めらるるようにつつちを見てるが俺はただぼーっとする。俺じゃあ何もできないからな。

「よっ」

ん？ああ貴史か。ってかなんで俺がみえる。

「足、どうしたんだ？」
「そうか、骨折で目立ったのか。」
「ちよつと車に轢かれて骨折したんだ」
「マジでか！大丈夫か！？」
「大丈夫、大丈夫」
「そうか、気をつけるよ」
「そう言つて美月の所に行った。」
「そうこうしているうちに休み時間が終わった。」

「昼休み、俺は、質問責めから解放された美月と一緒に昼食をとっていた。」
「そういえばあんた、先生には見えないけど、貴史には見えたよね。もしかして距離が関係してたりするわけ？」
「その通りだ。今は骨折のおかげでいつもより見えやすいから、だいたい半径二メートルぐらいなら見えると思うぞ」
「へえ、……あれ？でも病院にいたときは周りの人は見えてなかったよね」
「病院にギブスした人がいるのは当然だろ」「ああ、そつか。病院だと逆に紛れちゃうんだ」
「そ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0946n/>

俺はここにいる!

2011年1月22日23時36分発行